

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：34418

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12387

研究課題名（和文）診療場面における情動表出を伴う疑問文発話の認知語用論的研究

研究課題名（英文）A cognitive-pragmatic study on understanding empathy through question-answer sequences in medical discourses in Japan

研究代表者

後藤 リサ（Goto, Risa）

関西外国語大学・英語国際学部・准教授

研究者番号：00712100

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本語の診療場面の会話において、いかなる質問、および応答が医療従事者と患者の間の共感的コミュニケーションを構築するのに有効であるのかを、言語学的手法を用いて明らかにすること、およびその成果を医療現場に還元することである。医療現場で収録された会話を、認知語用論的枠組みを主軸とし、医療人類学や現象学的な解釈の視点も加味した融合的な解釈理論を用いて、質問と応答の発話のタイプ別に分析し、共感的コミュニケーションが構築され得る過程において見られる典型的な会話パターンを明らかにした。分析結果は研究協力者らと共に教育的見地からの再検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療現場で求められる共感的コミュニケーションの手法として、医療人類学や現象学的な解釈的視点はよく知られるところである。一方、本研究で主軸としている認知語用論の理論（主に関連性理論）の適用は新しい視点であり、そうした複数の言語理論を融合的に用いた分析の結果を医療従事者や医療系大学の教員たちと共有することで、患者とのコミュニケーション上の問題解決への糸口となり得る、医療系大学の学生たちへのコミュニケーション教育に役立てることができる、という二つの点での医療現場への還元を期待できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify, using linguistic methods, what types of questions and responses in a medical discourse in Japanese are effective in constructing empathetic communication between a medical professional and a patient. Pertinent results will be applied back to the medical field. We analyzed conversations recorded in medical settings by using a fusion of cognitive-pragmatic theoretical framework and other linguistic perspectives, including anthropological, and phenomenological interpretative perspectives. The findings identified typical conversational patterns related to constructing empathetic communication between a medical professional and a patient. Those patterns were linguistically analyzed based on the types of questions and responses. The results of the analysis were reviewed from an educational point of view with our research collaborators.

研究分野：語用論

キーワード：医療場面の会話 談話分析 情動表出と理解 質問 - 応答のインタラクション 共感的コミュニケーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

医療の現場で広く活用されている医療コミュニケーションの発話分類マニュアルである、RIAS (Roter Interaction Analysis System) (Roter 2010) の日本語版 (野呂・阿部・石川 2011) では、日米のコミュニケーションの違いを考慮した上でいくつかの改変を加えているが、中でも「共感 (Empathy)」の定義を拡大し、医師と患者の共感のプロセスをより日本語会話分析に適したレベルで可視化できるような方策へと改良している。

他方、言語学からのアプローチでは、『病院のことばを分かりやすく一工夫の提案』(国立国語研究所 2009) でも提言されているように、「患者の分かることばで話す」という発話産出にかかわる視点の重要性が広く認識されるようになった。また、看護における解釈学の視点として知られるベナーによる一連の研究 (Benner et al. 2011 ほか) では、看護師の専門的スキルに内在する知識 (臨床の知見) に着目し、臨床の知見を以てコミュニケーションを系統的に観察することの意義を唱えている。

共感的コミュニケーションのあり方を模索することの重要性は、本研究が拠り所とする語用論的な知見からは、「情動 (emotion)」の理解と関連付けられる。例えば、「(驚いて) 来週本当に休めるんですか」と問いかけられたとき、「驚いている」という気持ちが共有されれば、この質問の背景にある意図が明らかとなる。発話のことばに込められた気持ちの解釈が、いかにしてことばの解釈に影響を与えているかを探ること、即ち、「ことばと気持ちの認知プロセスを言語化すること」は、認知語用論的な研究の真髄であると考えている。

先行研究では、社会言語学の視点からの医療談話の情動の分析が主流であり (植田 (2014, 2017) ほか)、語用論の分野での理論的枠組みを用いた情動の研究はまだまだ発展途上にある。そこで研究代表者による先行研究 (Goto 2018) では、Sperber & Wilson (1986/1995) 以降の一連の関連性理論に基づいた認知語用論の分析手法を用いて、疑問文発話時に伴う「情動」の機能に着目し、特に「驚き」や「嘲り」などが発話に伴う場合の解釈について独立したテーマとして分析を行ってきた。語用論的推論能力、すなわち、他者の意図や信念の心的表示に関わる能力は、情動を伴う疑問文発話解釈では高い能力が求められることを明らかにした。

以上のことを踏まえ、本研究では、診療談話を分析の対象とし、情動表出を伴う疑問文発話に焦点を当て、共感的コミュニケーションが構築されていく中での情動による認知的効果を解明するとともに、共感的コミュニケーションの認知モデルを提案する。

2. 研究の目的

本研究では、医療現場の質問文発話を分析対象とし、疑問文発話が本来もつ「問いかけ」「確認」「依頼」の機能とポジティブ/ネガティブな情動 (喜び・安心/怒り・不安等) との相互作用を認知語用論的に分析することを通して、医療現場の共感的コミュニケーションのモデルを提示する。また、これら一連の言語学研究の成果について、医療従事者と共有することにより医療現場の診療行為や教育に還元する、ということもまた目的の一つとする。言語学的観点というものにあまり馴染みのない、「現場の」人々 (医療従事者、医療系大学教員、学生、患者、患者の家族、等を含む) が何気なく使っていることばに焦点を当て、その分析結果を彼らと共有し、彼らから新たな気づきを引き出すことは、言語学のフィールドにおいても、医療現場においても意義のあることと考える。

3. 研究の方法

【質問 応答のタイプ別分類に向けた理論的枠組みの決定】

医療従事者が作成した、医療現場で用いられているマニュアル等 (上述の RIAS ほか) の情報・資料収集を行い、そこで行われている発話の分類方法を整理し、本研究が依拠する言語学的な視点からの分類方法に基づき再検討する。その際、本研究が主たる理論的枠組みとして用いる関連性理論の文献に加え、医療人類学、現象学などの解釈学に関する文献も精査し、医療現場の談話分析に適していると思われた分析手法をも用いることで、融合的な視点からの分類手法を見出すことを目指す。

【言語資源の分析手順】

(言語資源は、A. 医師と患者の会話、B. 障がいのある子どもの親たちによる座談会での会話、C. 模擬患者と看護学生のロールプレイ会話、など複数の「医療現場の会話」をスクリプト化したもの)

スクリプトから「質問 応答」のインタラクションを抽出し、共感の構築に成功したことが顕著な事例を抽出し、その根拠となり得る因子としての「質問のタイプ」について、言語学理論に基づいた分析視点からの分類を試みる。分析視点というのは、主に、患者の情動を伴う発話を医療従事者がどのように理解したかという「医療者の認知過程」、および医師と患者が共感を得ていく過程 (共感のプロセス) のそれぞれにおいて、どのような「質問 応答のインタラクション」が適切に機能したかを分析し、記述することである。

【分析に用いる理論的枠組みの概要】

本研究における談話分析は、以下に挙げるような発話解釈を主とする。発話解釈とは、文字通り、一つ一つの発話の言語情報・パラ言語情報の解釈を行うことである。本稿で分析対象とするのは医療現場の会話を構成する各発話、および各発話の言語情報・パラ言語情報である。たとえば、患者による発話「前に担当してくれた先生がすごく怖かったです。聞きたいことも聞けずには、はいはい、といて帰ってきたら、いただいた薬が合わなかったんです」の分析（「5．主な発表論文等」の「雑誌論文」4件目、後藤 2022）においては、「怖かったです」という言語表現から、患者のネガティブな感情を伴っているという解釈が優先的に浮かぶかもしれない。しかし問題は、発話解釈がこのような言葉の文字通りの意味を想定して終了といった単純明快なケースばかりではないところにある。上述の発話において、患者は実際には肯定的な笑いを頻発しており、「笑い」（パラ言語情報）が現在の医師への親近感を示していると解釈できる。さらには、「怖かった」という感情を表す言語情報を共有することで、医師との間での共感の構築を進めているのだという解釈も可能である。

別の例では、発話者の主観的な程度性を示す言語要素をどう扱うかという問題がある。たとえば、医師による発話「これらの薬をきちんと飲めますか」において、「きちんと」の程度性の意味解釈において、聞き手である患者の脳裏に浮かぶであろう想定と、発話者である医師が期待する想定とが同一・類似したものであるとは限らない。この点に着目した解釈論では、各発話参加者が推論を通してアクセスし得る文脈情報を分析に加える必要がある。文脈情報から、程度性にかかわる「ある想定」が復元されると仮定し、記述する。つまり、ここで用いるのは、発話参加者の頭の中に復元され得る想定を、「推論による解釈」として記述する手法である。

これらの一連の語用論的な解釈の記述に関する研究手法は、関連性理論（Sperber & Wilson 1986/1995）に基づく。関連性理論によると、推論による解釈というのは、言語情報に加えて、解釈者の意識上にある様々な情報、例えば少し前に経験した出来事や直前の誰かの言葉から明らかとなった情報などを、当該発話の正しい解釈への手がかりとして用いた結果導出される、より関連性の高い解釈を指す。手がかりとして用いられる様々な付加情報を、文脈情報と呼んでいる。

4．研究成果

「情動効果」の概念の提案

本研究では、関連性理論の「情動効果（affective effect）」（Sperber & Wilson 1995）の概念を踏襲した、「共感的コミュニケーション」の理論的分析に貢献する推論モデルを提案した。具体的には、医師と患者の良好なコミュニケーションを通して共感が構築されていく過程に着目し、その過程での（当該発話による）認知的効果について説明する「情動の認知モデル」の基礎となる考え方を提示した（「5．主な発表論文等」の「図書」2件目、後藤 2019）。それによると、発話に伴う感情・気持ちの理解が発話者と聞き手（解釈者）の間で相互に共有されるとき、以下の(a)~(c)に示すような、発話に伴う情動がもたらす認知効果としての「情動効果」がもたらされる。

- a. 発話に伴う非言語的の情報としての発話者の情動が参加者間で（相互に）共有される。
- b. 解釈者の中に（a）に関連づけられたある情動が生じる。
- c. （b）で生じた情動が発話の認知効果をもたらす動力の一部となる。

国立がん研究センター東病院看護部（2015: 42）によると、共感の概念とは情動（感情）の表出からその認知、および内省（reflection）までの一連の「共感のプロセス」のことを指し、さらには内省を経て、理解したことを相手に伝える行為もまた、共感のプロセスの一部をなすという。上記（a-c）に示した情動効果もこれに類した「プロセスとしての共感」を記述するものである。

（ で提案した）語用論の推論モデルのナラティブ分析的視点との融合

先行研究：解釈のメタ言語的可視化

植田（2017）は、診療談話の社会言語学的分析の検証において、医師らへのインタビューを行い、彼らの専門家としての解釈の確認を通して解釈をメタ言語的に可視化するという分析を試みた。植田の言葉を借りると、この分析手法は、Narrative-Based Medicine（ナラティブ・ベイスト・メディスン）と呼ばれる「物語と対話に基づく医療」に貢献する。植田の研究では、後者の解釈学的なナラティブ研究の立場から、医師と患者の談話の中での言語要素のみならず、「笑い」や「沈黙」などのパラ言語的要素をも分析対象とし、ポライトネス理論等の社会言語学的視点を加えて分析している。さらには、その談話の医師とは別の複数の医師たちへのインタビューを通して、医療従事者の目線での発話の再解釈を行っている。植田のナラティブ分析においては、こうしたボトムアップ的な発話解釈手法により、「医師側のフレーム」（すなわち、医師の言語・非言語において内在する知識や意図、価値観など）を多層的に解き明かしていくという意義が見出される（植田 2020: 200）としている。

本研究での応用

本研究では、発話解釈可能性についての聞き取り調査の対象を、より多様な視点が得られることが予測できるという観点から、医師だけではなく看護師やセラピストなどの医療職種にも拡げ、次のような調査を行った（「5．主な発表論文等」の「図書」2件目、後藤 2019）。患者の「涙声」を伴い（死への）強い不安を表出している質問文発話を分析対象とし、複数の医療職種従事

者（言語聴覚士、看護師）の協力を得、彼らによる当該発話の解釈、および当該発話への適切な応答とは何か、という問いへの回答を得た。聞き取り調査の結果は、植田による上述の研究と同様、解釈の多様性を強く示すものであった。患者が何らかの回答を期待しているか否かについて、および涙声による情動の表出の程度について、解釈が分かれた。（感情も含め）ある情報が「意図的に」伝達されているか否かの判定と、さらにはその意図が「明示的に」伝達されているかどうかの判定は、感情表出を伴う発話解釈において重要なポイントであると考えられるが、この観点からの適正な解釈の難しさを顕著に裏付ける調査結果となった。

発話分析に基づく成果

【成果1 確認疑問文の下位分類】

RIAS に基づいた野呂・阿部・石川（2011）の分類では、「質問」と「確認」とを大まかに区別しているが、本研究の認知語用論的な視点からの分析においては、言語要素のレベルまで分解した上で、確認疑問文のさらなる下位分類を行った（「5. 主な発表論文等」の「雑誌論文」1 件目、後藤 2021）。例えば、野呂・阿部・石川の分類では、次の（1a）のような発話を「質問」、（1b）のような発話を「確認」としてしている。これらを認知語用論的視点から見ると、質問文発話のタイプを分ける言語的要素（文末辞の「か」と「ね」）や、話者の既存の想定（極性の偏りのある想定）の有無といった観点から分析が可能で、これらの分析的視点により確認の意図の程度性までも分析対象とすることができる。また、以下のように各質問文への応答を埋め込むと、発話者の認知環境にある想定（旧情報）と発話により顕在化され得る想定（新情報）の観点からの区別が可能となる。

- （1） a. 医師：頭痛がずっと続いているのですか？ [質問]
b. 患者 1：はい。 [答え] (= 新情報の提供)
c. 患者 2：いいえ、そうではありません。昨夜からです。 [答え] (= 新情報の提供)
- （2） a. 医師：頭痛がずっと続いているとおっしゃいましたね。 [確認]
b. 患者 1：はい。 [確認への同意] (= 旧情報の再確認)
c. 患者 2：いいえ、そうではありません。昨夜からです。 [確認への否認] (= 旧情報の否認
新情報の提供)

確認疑問文が確認しようとする想定とは、「共感的コミュニケーション」の観点からは、発話参与者間で共有され得る（と発話者が期待する）想定である。ここでいう発話者が期待する想定とは、例えば医師により産出された発話であれば、医療行為を適切に遂行するために行う以下に挙げるような確認事項である。

- （3） a. (診断仮説の確認) どのような頭痛か、もう少し説明してもらえますか？
b. (未終結の発話の確認) その結果どうになりましたか？
c. ((患者の) 先行発話内容の確認) 寝汗もかかれたのですね
d. ((患者の) あいまいな先行発話内容の確認) ご自分では、残業続きで頭痛がおさまらないと思っていらっしゃるのでしょうか
e. ((患者の) 言語化されていない気持ちの確認) 仕事がきつくて、逃避したい気持ちから入院を希望されているといったことはありませんか？

ここで挙げた 5 発話のうち、後半の 3 発話は疑問詞を含まない。患者により産出された先行発話に含まれる言語情報を医師が「解釈」した結果が言語化されているといえる。認知語用論の用語を用いれば、このような発話は、「表意（推論を経て導出され得る、命題内容に肉付けされた意味）」のエコーである（Sperber and Wilson 1986/1995）。

【成果2 共感的コミュニケーションの成功例】

上述の【成果1 確認疑問文の下位分類】から得られたタイプ別分類法を応用した本研究の成果の一つ（「5. 主な発表論文等」の「学会発表」11 件目、後藤・鹿野・湯山・本田 2021）においては、看護学生がある行為依頼を行ったときに模擬患者が否定的返答を産出した場合の、看護学生による再確認、再依頼の質問発話に着目し、患者の了承を得ることに成功した発話の言語的特性を分析した。スクリプトからは、模擬患者の否定的返答の後、最終的に肯定的な返答を得られるまでに、看護学生により産出された確認の質問発話のタイプとして、A. 患者の否定的な発話をエコーする発話、B. 理由付けを前置し明示する「～なので、いかがですか」といった長めの質問発話、C. 情報要請の文末辞「か」のほか、確認の文末辞「ね」やその混合となる「かね」を伴う質問発話、等が観察された。これらを考察した結果、(A)～(C)に挙げた質問発話のタイプに共通するのは、看護学生が模擬患者にある行為を促す目的が患者に明確に伝達され、理解されたのだということ、つまり会話参与者間で情報の共有がなされたのだということ、発話者が確認している点である。看護学生が「情報が共有されている」ことを患者に伝達することで得られる「共通認識」が、患者の肯定的な返答を促す一つの要因であると結論づけた。

上記研究成果（ ）の社会への還元

研究成果の医療現場への還元という点については、上述の一連の研究において、医療従事者や医療系大学教員らとも共同で分析を行い、言語学系学会のみならず医療系の学会において公表したことで、当初の目的を果たせたと考えている。特に、自治医科大学看護学部の本田芳香氏、鹿野浩子氏、湯山美杉氏らからは継続的な研究協力を受け、自治医科大学看護過程演習で行われたロールプレイ会話の音声データ(倫理審査承認番号:自治医科大学臨大 21-017、関西外国語大学 2021-1)を収録した。音声データをスクリプト化し、上記の言語学的な分析手法を適用した成果は、国内外の複数の看護系学会における共同発表および共著論文の形式で公表した。

<引用文献>

- Benner, P. E., Hooper-Kyriakidis, P. L., & Stannard, D. (2011) Clinical wisdom and interventions in acute and critical care: a thinking-in-action approach. Springer Publishing Company.
- Goto, R. (2018) Rhetorical Questions: A Relevance-Theoretic Approach to Interrogative Utterances in English and Japanese, Hituzi Syobo.
- 国立がん研究センター東病院看護部(編)(2015)『患者の感情表出を促す NURSE を用いたコミュニケーションスキル』, 医学書院 .
- 国立国語研究所「病院の言葉を分かりやすく」委員会(2009)『病院の言葉を分かりやすく 工夫の提案』 勁草書房 .
- 野呂幾久子・阿部恵子・石川ひろの(2011)『医療コミュニケーション分析の方法』(第2版)The roter method of interaction process analysis system (RIAS), 三恵社 .
- Roter, D. (2010) The roter method of interaction process analysis: coding manual. Unpublished.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1986/1995) Relevance: communication and cognition. Blackwell, Oxford.
- 植田栄子(2014)『診療場面における患者と医師のコミュニケーション分析』, ひつじ書房 .
- 植田栄子(2017)「患者と医師のインターアクション 量的および質的分析の両面から」『日本語学』第36巻4号, 32-45 .
- 植田栄子(2020)「医師に対するインタビュー・ナラティブ分析 メタ言語の可視化による Narrative-Based Medicine への貢献」, 秦かおり・村田和代(編)『ナラティブ研究の可能性 語り が写し出す社会』, ひつじ書房 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 後藤リサ・鹿野浩子	4. 巻 7
2. 論文標題 医療場面の会話における確認の質問発話の分析 - 「共感的コミュニケーション」の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 御殿山語用論研究論集	6. 最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鹿野浩子・後藤リサ	4. 巻 45
2. 論文標題 医療現場における共感とは 看護学生が模擬患者を車いすに移乗させる際の質問文発話に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会言語科学会第45回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤リサ・鹿野浩子	4. 巻 7
2. 論文標題 「問いかけと応答」の認知語用論的分析から見る共感構築の成功と失敗	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第7回IRI言語・文化研究フォーラム予稿集	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤リサ	4. 巻 8
2. 論文標題 医療現場の会話をどう観るかー認知語用論による発話解釈の手法、および社会言語学・現象学・言語人類学の各ナラティブ研究を概観する	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 御殿山語用論研究論集	6. 最初と最後の頁 67-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤リサ	4. 巻 8
2. 論文標題 医療現場の共感的コミュニケーション分析への言語学的アプローチ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 IRI言語・文化フォーラム予稿集	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 鹿野浩子・後藤リサ
2. 発表標題 医療現場における共感とは 看護学生が模擬患者に車いすに移乗させる際の質問文発話に着目して
3. 学会等名 社会言語科学会第45回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 後藤リサ・鹿野浩子
2. 発表標題 「問いかけと応答」の認知語用論的分析から見る共感構築の成功と失敗
3. 学会等名 関西外国語大学第7回IRI言語・文化研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 後藤リサ・鹿野浩子
2. 発表標題 医療現場における「確認」の疑問文発話 - 認知語用論に基づいた分類と応用
3. 学会等名 関西外国語大学IRI共同研究プロジェクト研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shikano, Hiroko, Goto, Risa, Honda Yoshika, and Yuyama Misugi
2. 発表標題 How do nursing students construct their words: an invitation strategies to transfer simulated patients from beds to wheelchairs
3. 学会等名 International Online Conference on Nursing and Midwifery (Mongolian National University of Medical Sciences) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Risa Goto
2. 発表標題 A cognitive-pragmatic analysis of vague questions in Japanese medical discourse
3. 学会等名 the 4th conference of American Pragmatics Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤リサ
2. 発表標題 診療談話にみられる疑問文発話についての一考
3. 学会等名 関西外国語大学IRI共同研究プロジェクト研究会 (第5回御殿山語用論研究会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤リサ
2. 発表標題 診療談話の語用論 疑問文末に現れる「ね」、「か」、「かね」を中心として
3. 学会等名 関西外国語大学第5回IRI言語・文化研究フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤リサ・神田千春・鹿野浩子
2. 発表標題 ワークショップ「医療コミュニケーションへの新しい視点 - 解釈理論を用いた言語学的アプローチ」
3. 学会等名 文化看護学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 後藤リサ
2. 発表標題 医療現場の共感的コミュニケーション分析への言語学的アプローチ
3. 学会等名 関西外国語大学第8回IRI言語・文化研究フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 後藤リサ
2. 発表標題 医療現場の会話をどう観るか 認知語用論による発話解釈の手法、および社会言語学・現象学・言語人類学の各ナラティブ研究を概観する
3. 学会等名 関西外国語大学国際文化研究所IRI共同研究プロジェクト研究会（第8回御殿山語用論研究会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 後藤リサ・鹿野浩子・湯山美杉・本田芳香
2. 発表標題 看護学生による「確認」の質問発話 言語学的視点からのタイプ別分析
3. 学会等名 日本看護科学学会第41回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鹿野浩子・後藤リサ・湯山美杉・本田芳香
2. 発表標題 模擬患者の排泄行為を促す看護学生の発話行為の意味 「～する」と「～した」に着目して
3. 学会等名 日本看護科学学会第41回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hiroko Shikano, Risa Goto, Misugi Yuyama and Yoshika Honda
2. 発表標題 Words matter when nursing students persuade simulated patients to take certain actions: question forms help patients realize their own illnesses
3. 学会等名 21st East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 鍋島弘治朗、山岡政紀、滝浦真人、荻野千砂子、井本亮、大津友美、後藤リサ、平田未季、堀内ふみ野	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 308
3. 書名 日本語語用論フォーラム 3	

1. 著者名 田中廣明、秦かおり、吉田悦子、山口征孝、小野寺典子、澤田淳、柴崎礼士郎、高梨克也、後藤リサ、定延利之、西山佑司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 272
3. 書名 動的語用論の構築へ向けて 第1巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	本田 芳香 (Honda Yoshiika)		
研究協力者	鹿野 浩子 (Shikano Hiroko)		
研究協力者	湯山 美杉 (Yuyama Misugi)		
研究協力者	神田 千春 (Kanda Chiharu)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関